

ハルシナイから上流の地名②0

前回は、安政四年(一八五七年)、松浦武四郎が掲載地図のペンケチビナタラ(Penke-cip-ne-hatar川上の・舟の形をした・渚)から、カパセイプイン(Kapap-sei-puyraコウモリ・巢の・岩場の白波)までの丸木舟による溯航記録を紹介した。

また、旭川のアイヌの人たちは、大正・昭和の頃になると、丸木舟での鮭漁はカパセイ(通称・コウモリ岩)まで、また、ペンケチビナタラから下流は、危険なので丸木舟では下れないと意識していたことも記した。

今回は、掲載地図のオンネナイ(公式河川名は神居第一線川)について見ていきたい。松浦武四郎は、このオンネナイで、初めて「少し平地有る様に見ゆる也」と、これまでと景観が異なる様子を書いている。

断章 旭川のアイヌ語地名研究

111 高橋 基

オンネナイ―右の方小川有。少し其川すじ平地有る様に見ゆる也。

明治二十三年に上川道路を通り調査した永田方正は、次のように地名解をしている。

オンネナイ(onne-nay 大川)―支流中の大川なり。橋あり、初め思案橋と名け、後ち観魚橋と名く。然れども魚は只鱒あるのみ。

永田方正が、「支流中の大川なり」と書いたのは、「カムイコタンからこまでの支流の中では」の意味と思われる。

掲載地図のイノペツ(伊野川)の流路延長が十七・三キロで、このオンネナイは、四・〇キロであることから明らかで、オンネナイが、カムイコタンの入口

という意識があったのであろう。

昭和三十年五年に知里真志保は、永田方正の説を受け

て、次のように地名解をしている。オンネナイ(onne-nay 年老いた川)―「親川」「大川」の義。永田氏の地名解に「支流中の大川なり」とある。

山田秀三は、『北海道の地名』で、オンネナイの地名解は、難解であるとして、今後の研究課題としている。

次に、掲載地図のオンネナイの五万分一地形図での記載履歴を解明する。明治三十一年製版図がオンネナイで、橋名の観魚橋もあり、永田方正の記録がそのまま写されている。以下、明治四十二年以降五



②旧道の2代の観魚橋



③バス停標識

回発行されるが、このオンネナイの記載がなく、昭和五十年発行の五万分一図に、「西オンネナイ川」と記載された。これは、「東オンネナイ」と対となるもので、その川が、掲載地図のイノペツ(伊野川)の支流で、富沢小学校の横を流れるオンネナイ川が、「東オンネナ

イ」として、東西の対としたものである。

昭和五十五年発行の五万分一地形図で、初めて、現在の公式河川名の「神居第一線川」と記載された。また、『北海道河川一覽』にも、神居第一線川と掲載され、神居第六線川までのアイヌ語地名の河川名は、ハルシナイをはじめ全て番号川に改悪されてしまった。

ただ、永田方正が明治二十三年に記録した、「観魚橋」の橋名は、現在も、写真①の橋名標識にもなっている。また、写真②の手前の橋は、旧国道の観魚橋で、奥に見えるのが、前旧道の観魚橋で、長さ約十七メートル、幅約五メートルのコンクリート製の昔の橋梁である。平成三年開通の現国道十二号の観魚橋と、三代の「観魚橋」が併存している非常に珍しい例である。その上、人家の無い場所でありながら、写真③のように、空知中央バスの深旭線の停留所として、「観魚橋」のバス停標識まで現存している。

明治二十三年に、永田方正が記録したアイヌ語河川名のオンネナイは、神居第一線川という味気ない番号川に改変されたが、「観魚橋」の橋名と、三代の橋梁に、アイヌ語地名を残そうとした永田方正の強い思いが伝わってくるように思われる。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します